学習と部活「文武共存」を実践

駿台甲府小・中学校、高校を擁す駿台甲府学園（甲府市塩部２丁目、山﨑善久理事長）は、「愛情教育」を建学の精神に、生徒たちのチャレンジング・スピリットを育む。進学校としても知られる駿高は今夏、野球部が全国高校野球選手権山梨大会で19年ぶりのベスト４に入ったのをはじめ、21年連続でインターハイへ出場した男子ハンドボール部は同校初の全国ベスト８となった。さらに、水泳部女子は県高校大会兼関東高校大会県予選で16年ぶりに学校対抗を制すなど「文武共存」を実践。「やる時はやる」駿台精神をモットーに、駿台生はさらなる飛躍を目指し、学習に部活に総力を挙げて取り組んでいる。

全国高校野球選手権山梨大会で19年ぶりにベスト４に入った駿台甲府高野球部。秋季県大会を前に３年生もそろい気を引き締める　＝甲府・駿高上今井野球場

駿高野球部 夏の山梨大会
チーム一丸 19年ぶり４強

「（池田健太郎）監督から徹底して指導されたのは『人としてどうあるべきか』。あいさつや言葉遣い、整理整頓など日常生活の大切さです。機敏に行動し、当たり前のことを当たり前にやる。それができなければ、野球でも勝てない、ということでした」。全国高校野球山梨大会で、19年ぶりに４強入りを果たした駿高野球部の３年生たちは口をそろえ、胸を張った。

駿高野球部に新たな一ページを刻んだ背景には、池田監督と部員たちの厚い信頼関係があった。駿中監督から移籍して３年目の池田監督にとって、３年生は、まさに〝二人三脚〟で歩いてきた同志。「人間性の育成」を指導の主軸に掲げ、「やるからには勝とう」と鼓舞する監督に、部員たちも全力で付いていった。

練習の質にこだわり

エース山下真範さんは「中学時代は無名だった僕を、高校では別人のように花開かせてくれました。監督には、チームで一番叱られたと思いますが、監督の一言一言で力が付いていくことを実感できました」と感謝した。

練習場は甲府市上今井町の駿中校庭横。放課後、駿高塩部キャンパスから約７キロの道のりを自転車で移動してから練習を始め、午後９時すぎまで続く。放課後の課外講習も多く、練習に遅れて参加する生徒も少なくない。「監督は『練習で大切なのは時間の長さではなく、中味の濃さ。中味の濃い練習ができれば問題ない』と言ってくれました」と、焦る３年生を心理的側面からも支えてくれたという。

山梨大会で４強入りを果たし喜ぶ駿高ナイン　＝小瀬球場

県大会準決勝で、今年の覇者・日川に敗れ、「甲子園で校歌を歌おう」という目標は達成できなかった。しかし、岩下弾主将は「飛び抜けた選手はいないが、総合力でここまで来られた。まさに『チーム駿台』が体現できました」。一つの壁を破ったナインたちの表情は明るい。

今夏、20人の登録メンバーはすべて県内中学出身者。「私立というと県外出身者で固めた印象を持たれがちですが、メンバーは県内の生徒ばかり。野球をやりたくて集まった仲間と駿高でプレーすることにプライドがありました」と依田彪吾さん。山下さんも「さまざまな思いをパワーに変えて頑張ってきました」と話す。

硬式野球経験者はほとんどいず、大半が軟式出身。1年時は、練習量の多さや厳しい練習内容に戸惑う部員も多かったという。しかし、駿中時代から池田監督をよく知る主砲亀田真吾さん、武藤陸副将、〝切り込み隊長〟長田壮太郎さん、依田さんの駿中出身勢らがチームの橋渡し役となり、結束力を強めてきた。

部員たちの飛躍のきっかけは、県外強豪校との練習試合だった。「県内大会1、2回戦負けのチームであっても、強豪校と対戦して、ものおじしないチームにしたいと考えました」と池田監督。近都県をはじめ全国の強豪校の胸を借りた。

後輩に「甲子園」託す

武藤副将は「昨夏、県大会で初戦敗退してから臨んだ練習試合は100以上。負けていても途中であきらめず、最後まで全力を尽くすことを心掛けてきました」。敗戦して帰途に就くバスの中も、3年生を中心に課題を話し合っては次戦に生かしてきたという。

亀田さんも「1、2年時からベンチ入りできた3年生も多く、経験を積めたことはよかった。春の段階では意識に課題もあったが、県外強豪校と互角に戦えるようになり、自信になりました」と表情を引き締めた。

マネジャーとして陰から支え続けた小宮山喜玖子さんは「監督の『視野を広く持て』という言葉は、選手だけでなく、私の心にも深く残りました。看護師を目指す私にとって、人を思いやる心、気づきの大切さは財産となり、宝物となりました」と笑顔を見せた。

「後輩たちには、僕たちを超えて、甲子園を目指してほしいですね」とエールを送る3年生。

準決勝で中越え三塁打を放ち、一矢を報いるホームを踏んだ長田さんは「池田監督との6年間は、何物にも替え難い経験でした。最後の夏、僕にとって最高の指導者と、最高の仲間たちと共に戦え、幸せでした」と充実感を口にした。

駿中体育祭 12競技に熱戦
「やる時はやる」を体現

スポーツの秋。駿台甲府中（甲府市上今井町、河﨑哲郎校長）は７日、駿中体育祭を開き、騎馬戦や色別対抗リレーなど各種目に汗を流し、仲間と力を合わせて勝利を目指した。

スローガンは「やるときはやる　駿中生」。松岡由樹体育祭実行委員長は「８色から４色対抗戦となって２年目。今年は12競技で、昨年より一つ増えましたが、実行委員が機敏に動いたおかげで運営がスムーズにいきました」と安堵（あんど）の表情を見せた。一方で、松岡さんが所属していた赤組は、終盤までのリードを守り切れず２位に甘んじただけに残念しきり。それでも、「仲間と全力を尽くせたので悔いはありません」と表情を引き締めた。

体育祭のクライマックスは、最終種目となった男女各色別対抗リレー。終盤までトップが次々に入れ替わる女子を青組が制すると、男子の青組も中盤に首位を奪い、そのままバトンをつないでトップでゴールを駆け抜けた。

クライマックスとなった男子色別対抗リレー

総合優勝を飾った青組団長の清水大暉さんは「男女ともにリレーは自信があったので、それまでいかにトップとの点差を縮められるかが課題でした」と満面の笑みを見せた。清水さん自身は１年生から団体で負け知らずとなったそうだが、「青組としては３年ぶりのＶ奪還。仲間と力を合わせた成果です」と仲間の健闘をたたえていた。

男女リレーを制し喜ぶ生徒たち　＝いずれも駿中グラウンド

〈企画・制作〉山梨日日新聞社広告局

駿高男子ハンド部
水泳部女子
インターハイで初の８強
県学校対抗16年ぶり優勝

インターハイハンドボール男子で、全国得点王となった佐藤草太主将（中央）。大学進学後も競技を続け、ワンランク上を目指す

佐藤草太さんから主将を引き継ぐ２年の古屋悠生新主将。全国制覇を目指し、闘志を燃やす　＝いずれも駿高塩部キャンパス

駿高男子ハンドボール部は８月、高校スポーツ界最高峰のインターハイで、同高初のベスト８入りを果たした。21年連続21度目の挑戦での快挙で、八田政久監督は「ようやく一つの壁を越えることができました。選手たちの努力のたまものです」とたたえた。

圧巻は、佐藤草太主将。身長168㌢ながら、持ち前のスピードと鍛えられた体幹、磨き抜かれた瞬発力を生かし、ディフェンスの間を突くカットインシュートなどで全国の得点王に輝いた。

厳しい練習自ら課す

高さが求められるフローターを任された佐藤草主将は「それほど身長が高くないのに起用してもらったので、チームに貢献できるよう必死でした」。連日、約４時間に及ぶチーム練習に加え、練習後にはシュート練習や家での体幹トレーニングなど、厳しい自主練習を自らに課してきた。

監督から「弱いチーム」とあえてハッパをかけられてきたというが、「『絶対に勝てる』と信じてみんなで頑張ってきた。先輩をはじめ、多くの方々の後押しのおかげ。感謝しています」と目を細めた。

厳しく豊富な練習量で知られる同部にあって、薬学部や歯学部を目指す生徒もいる。佐藤大誠さん、古屋智紀さん（ともに3年）は、中学で競技経験はあったものの、当初は志望する大学進学に専念するため、競技を続ける意思はなかったという。

入部は共に1年の夏休み。現在は、競技歴11年目となった佐藤大さんは、スポーツ少年団―塩山中で佐藤草主将と共にプレーしてきた。「草太と一緒にプレーできるのも高校が最後。勉強だけでなく、ハンドボールも頑張って悔いが残らない高校生活にしたかった」と振り返る。

駿中出身の古屋さんは駿小1期生。「練習は厳しかったけどハンドボールの魅力に引き込まれました」。練習は夜遅くまで続くことから、学習時間が足りないと思えば、学校での休み時間も有効に使い、少ない時間でも見つけては学習に充ててきたという。

学習との両立に苦しんだ時期もあった2人は「仲間がいたから頑張れた」という。「ハンド部で鍛えられた精神で、まずは大学受験を乗り切りたい」と古屋さん。佐藤大さんも「厳しい練習に耐えた根性を、社会に出てからも生かしていきたいです」と表情を引き締めた。

６月の県高校水泳大会団体を制した駿高水泳部女子。（左から）小松えりさん、岩本紗季さん、小西麻友さんは国体県代表にも選ばれた　＝小瀬プール

大会新の栄冠に喜び

一方、6月の県高校水泳大会で団体優勝した女子水泳部員たちは「私たちが生まれたころ以来の優勝と聞いて驚きました」。個人種目中心の競技だが、小松えりさん（3年）は「一番楽しいのは仲間とつなぐ400㍍リレー。この種目で常勝校を抑え、大会新で栄冠を手に入れられたことが何よりうれしかったです」と笑顔を見せた。

今年は1年生3人を迎えたが、部員はわずか7人。練習は個々が通うスイミングスクールがベースとなるが、始業前にも走り込むなど意識の高さが強さを後押しした。

中でも小松さんは「好きなことをやらせてもらえるのは親のおかげ。水泳も勉強も手を抜きたくありません」と話す。学習時間を確保しようと、毎朝6時半に登校すると約1時間は勉強。その後、始業前までのランニングを続けてきたという。

リレーメンバーで、小松さんと共に国体メンバーにも選ばれた2年の岩本紗季さんと1年の小西麻友さんは「明るく、学年を超えて仲がいいのが駿高の魅力。駿台らしいレースで、今後も記録を更新し、歴史を塗り替えていきたいです」と決意を新たにしていた。